

詩篇 108 篇「私の心は揺るぎません」

新しい年の初めに、このみことばによって教えられ、励まされて、この年を始められることを感謝します。

1. 神への賛美（：1～5）

前半の1節から5節は詩篇57篇からの引用です。57篇の表題に「ダビデがサウルから逃れて洞窟にいたときに」とあります。サウルは功績を挙げるダビデを妬んで殺そうとします。ダビデは逃れて、洞窟に潜んでいたことがありました。ダビデはあくまでも主の御支配に委ね、サウルに齒向かうことはしませんでした。

命を狙われる中であって、1節にあるように、神様の助けを願い求めました。不安と悲しみの中でも、3節にあるように、神様が救ってくださると信頼しています。そして、後半の7節からは神様を賛美しています。その部分が108篇の前半に引用されています。

108篇1～3節。感謝と信頼をもって神様を賛美しますと繰り返しています。主語はすべて「私」です。どのような中であっても神様を賛美するという、信仰者の強い思いが語られています。「そして、個人の信仰の告白ではありますが、「諸国の民の間で」告白し、賛美すると決意しています。

心を揺るがせられるような中であっても、夜の闇のような状況であっても、神様を賛美することができるのはどうしてでしょうか。

4節。神様を賛美するのは、神様の恵みとまことのゆえであると言います。その神様の「恵みとまこと」とはどのようなことでしょうか。4節では、神様の恵みとまことは天にまで及ぶような、人知をはるかに超えたものだと告白しています。また57篇3節では、「天から助けを送って 私を救い」と「恵みとまことを送ってください」とが並行して語られています。どんな助けも与えられないと思われるような中にも、神様の助けは与えられ、人が考えることも期待することもできなかったような救いが与えられると言われています。そのように神様の「恵みとまこと」とは、人に与えられる救いの約束や御業を指して語られています。

信仰者がどのような中であっても感謝と信頼をもって神様を賛美することができるのは、神様の恵みとまことが計り知れないほどであるからです。ご自身の契約に基づいて誠実な愛を尽くして、変わることがないお方だから本当に素晴らしいと賛美することができるのです。

2. 神への信頼（：6～13）

信仰者個人の神様への賛美について語って来た前半から、後半に移ると、神の民、信仰共同体の歩みについて語られます。後半の6節から13節は詩篇60篇からの引用です。60篇の表題に「ダビデがアラム・ナハラヤムやアラム・ツォバと戦っていたとき、ヨアブが帰って来て、塩の谷でエドムを一万二千人打ち殺したときに」とあります。これはダビデがイスラエルの王となって、イスラエルに敵対して来る周辺の国々と戦い、勝利していった頃のことを指しています。イスラエルは勝利を重ねていきましたが、一時的には危機的な状況があったことが、この60篇から示唆されています。ダビデが北の国々アラムやツォバと戦っているときに、その機に乗じて南のエドムがイスラエルに攻め込んで来たようです。それで、将軍ヨアブが派遣されて帰って来て、エドムと戦い、勝利したということのようです。一時的ではあったけれどもそのような危機的状況に置かれた時に歌われたのが、この60篇です。

60篇1～2節。敵に攻められ、敗北を味わい、動揺している様子があり、その中で神様に訴えています。そのような祈りが続く60篇の5節から部分が108篇の後半に引用されています。

108篇6節。神様はご自身の民を力強い「右の手」で救い出してくださいという信頼をもって、願い求めています。それに対して神様は答えてくださいました。7～8節ではイスラエルのことが語られています。神様が「わたしは喜んで…分け、…測ろう」と言われます。神様がイスラエルを治めておられます。また、「わたしのもの」と繰り返し言われ、神様がイスラエルを所有し、用いておられます。

そして、イスラエルだけでなく周囲の国々も神様が支配しておられます。9節のモアブ、エドム、ペリシテは、それぞれ東、南、西に位置する、イスラエルの敵です。神様がそれらの敵を支配し、勝利すると言われます。つまり、イスラエルも、周囲の国々も、神様が治めておられる、神様は全世界の主権者であると自ら宣言

しておられるのです。

このような神様の宣言を受けて、信仰者は神様への信頼を強くされます。12節にあるように、神様の助けを切に求めています。たとえ人による救いがあったとしても、神様がともにいてくださらなければ、それはむなしいものだと言います。本当の救い、本当の勝利は神様によってこそ与えられると告白します。

13節。背後から敵に攻め込まれるような危機的な状況にあっても、神様に信頼するなら、神様が敵を踏みつけてくださり、勝利することができるという信仰を告白します。そして、「力ある働き」をすることができるとしたら、それは神様にあってできることだとへりくだっています。このみことばによって、神様への信頼を励まされます。

3. 信仰者への適用

詩篇 108 篇の元になっている二つの詩篇はそれぞれ、ダビデが経験した苦難の中で歌われたものです。どちらも、苦難の中で主に助けを求めて始まりますが、後半には神様への賛美、神様への信頼となって終わっています。その後半部分をそれぞれ引用して、一つにしたということは、それぞれの詩篇の背景を離れて、広く信仰者の現実の中で適用するように意図されたのではないのでしょうか。私たちもこの 108 篇から、神への賛美、神への信頼を励まされ、促されます。

ダビデは不安と悲しみの中でも、「神よ 私の心は揺るぎません」と神様に向かって確信を言い表しました。主をほめ歌いますと繰り返しました。それは神様の恵みとまことは計り知れないものだからと示されていたからです。また、危機的な状況の中でも、神様が主権者であることを覚え、そのお方が神の民とともにいてくださることを確信しました。そして、神にあって力ある働きをすることができるという信仰を告白しました。

私たちも主の恵みとまことを知らされています。ダビデよりも、旧約時代の聖徒たちよりも明らかに知らされていると言ってもいいでしょう。それは、イエス・キリストによって恵みとまことが実現したからです。クリスマス礼拝で開いたヨハネ 1 章 17 節に「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである」とあります。神様の契約に基づく誠実な愛と人知をはるかに超えた神様の真実はイスラエルに対しても与えられていましたが、主イエス様によって完全に成就しました。救い主イエス様によって、私たちは罪から救われ、神の民として生きることができます。主の恵みとまことによって、救われ、生かされ、主を賛美し、主の御業の中で用いていただけます。私たちもイエス様によって与えられた救いを感謝して、主を賛美します。私たちも主権者であるお方の導きの中で、その方がともにいてくださって、力ある働きをすることができるのです。

私たちもイエス様によって与えられた救いを感謝して、主を賛美します。私たちも主の導きの中で、主がともにいてくださって、力ある働きをすることができます。新しい年が始まり、私たち主の民が、それぞれの遣わされているところでの歩みにおいても、教会としての歩みにおいても、これから向かっていくところにどのようなことが起こるか分かりませんが、みことばによって教えられ、励まされて、主を賛美し、主を信頼して歩みたいと思います。

「神よ 私の心は揺るぎません」と告白して、歩ませてくださいませう。どのような中にあっても、みことばによって、主への賛美、主への信頼に立たせていただきませう。